

# さちひろ

天理教狭千廣分教会の広報紙

- 1面・ツキを呼ぶ魔法の言葉
- 2面・よろこびいっぱい
- 3面・おやさま逸話篇から
- 4面・教会の動き・編集後記

発行：天理教狭千廣分教会 〒589-0021 大阪狭山市今熊1-1133 Tel.072-365-2571

E-mail:wat@sachihoro.com url:http://sachihoro.com 編集兼発行人・山口 渡

## 教会の動き

- 朝づとめ：毎朝・6時30分
- 夕づとめ：毎夕・7時00分
- 春季大祭：1月21日午後1時30分
- 秋季大祭：10月21日午後1時30分
- 月次祭：毎月21日 午後1時30分
- 春・秋季霊祭：3月22日、9月22日 午後1時30分



教祖百二十年祭

## 教祖百二十年祭盛大に

一月二十六日、おやさま百二十年祭が教会本部で執り行われました。猛烈は人数でした。警察の発表によりますと17万人だったとのこと。それだけの人が神苑を埋めたのですからその混雑ぶりが想像できると思います。筆者は中庭の人波に埋もれて参拝してましたが、女子トイレはどこも行列でかなりの待ち時間を要したとか。今年、年祭の年で、おぢばでは特別な催し物が開催されます。本部のお



つとめに使用されるかぐら面の展示や「親神様の守護」をグラフィカルに示す映像シアターなど。みなさんも是非、おぢばにかえりましょう。

## 編集後記

▼お正月をはさんで、約二カ月、休刊しました。この月で、小紙は一周年を迎えます。今年はおやさま百二十年祭の年です。教えを世界に、心をおぢばに向けて一歩でも前進を心がけます。

▼巻頭で紹介した本は、月刊「到知」という雑誌に掲載されていたものを知人を紹介して知りました。「人の生き方を探求する人間学の雑誌」。定期購読の雑誌で一般書店では販売されていません。  
<http://www.chichi.co.jp/>

▼年度末は、進学・就職など区切りの旬。わが家にも、入試を終えた輩が一名おられます。希望の月になりますように！

▼本紙へのご意見をお寄せ下さい。本年もよろしく願います。

編集兼発行人・山口 渡  
平成18年2月10日  
大阪狭山市今熊1丁目1133番地  
Tel. 072-365-1257-1

## 教会の動き



※教会の場所は、左の地図のマーカー。市立公民館の裏・西側です。

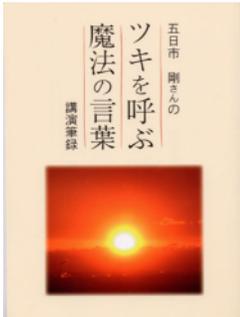
題名のこの本、大爆発しているそうです。2007年8月に発売、現在まで60万部とか。

著者の五日市剛さんは昭和39年、岩手県のお生まれで、国立宮城高専を卒業後、豊橋技術科学大学に編入学。後にマサチューセッツ工科大学に留学。現在41才の工学博士。5社の研究顧問をつとめる傍ら、講演活動を展開中です。

「魔法の言葉」などと書いていたので、呪術めいたことを予想しましたが、話はまったくそういう次元のものではありません。どのようなことでも、わたしの前に現れてくることを、積極的・肯定的にとらえて前向きに生きるその生き方が語られています。

人間関係に思い悩んだ挙げ句、日本にない異文化に触れようとイスラエルに長期の旅行を計画した著者が、その途中不幸な事件に次々と遭遇します。

ところがそうした中で、イスラエル・テルアビブで70才前後の小柄なおばさんと出会います。この出会いが五日市さんの運命を大きく変えたのです。テルアビブの知り合いもないし、探したがホテルもなく、結局このおばあさん宅にお世話になります。この人はもちろんユダヤ教人ですが、人間の生まれ変わりを信じていること、人間には運命があること、そして「ツキ」というものがある、と話し、そして「それは簡単に手に入る」と語ります。そして教えら



## ツキを呼ぶ魔法の言葉

れたのがこの「ツキを呼ぶ魔法の言葉」なのです。二つあります。一つは『ありがとう』で、もう一つは『感謝します』。『ありがとう』は、何か嫌なことがあったときに使います。イライラして急いでいたとき、交通事故に遭ったそのときこそ、『ありがとう』という言葉に出しましょう。親が、あるいは愛おしい人がなくなるときに、歯を食いしばって『ありがとう』と言ってみましよう。そういえば、日本語でも『ありがとう』を漢字で書くこと「難」が「有」と書くではないですか。次に『感謝します』です。逆に今度は、良いことがあったら『感謝します』と言ってみよう、というのです。たとえば待ちに待った運動会は晴天だったら、「晴れて感謝します」と言ってみます。またそれが実現していません。それでも「そうになりました。感謝します」と言い切ってしまう。言い切ると本当にそうなるというのです。「感謝します」と口に出せたら思いが実現するというのです。不幸なことがあっても笑顔で『ありがとう』と言う。その笑顔が不幸の連鎖を断ち切ってくれるのです。『感謝します』ということによって願望を実現させるのです。笑顔はその触媒みたいなものだと言えます。

おばあさんは、また逆に絶対に口にしてはならない言葉を教えてくれました。それは、汚い言葉です。ためいばかやろー、死んじまえなど。そんな汚い言葉を使っていると、その人自身もそんな人生を歩むことになりまよ、ということです。日本にも「言霊」(ことだま) 信仰がありますよね。言ったことが言ったとおりそのまま、返ってくる、成ってくるのです。言葉の使い方を変えましよう。(とやの健康ヴィレッジ・刊)



天理の紹介

よろこびいっぱい

「息一つの使い方」

寒い朝、手がかじかんでくると、皆さんはどうしますか。手に「ハー」と息をかけるでしょう。手が冷たいとき、息で手を温めます。おみそ汁が熱くて飲めないとき、皆さんはどうしますか。おみそ汁に「フー」と息をかけるでしょう。熱いおみそ汁が、息で冷まされます。不思議ですね。同じ息なのに、息の使い方方で、相手を温めたり冷ましたりできるのです。息を使うもう一つの仕事に、「言葉」を出すことがあります。言葉も同じなんです。言葉一つで相手の心を暖かくしたり、ヒヤリと冷たく傷つけることもできます。教祖は、榊井伊三郎という人に、「内で良くて外で悪い人もあり、内で悪く外で良い人もあるが、腹を立てて外で悪い人もあり、内々治まる。」と教え下されました。朝の「おはよう！」の言葉でみんながほっと温かくなります。「大丈夫だよ」の言葉で、悩んでいる人の心が温かくなります。できれば言葉は相手を温めるような、優しい言葉を使いたいですね。(リトルマガジン『天理少年』2006年2月号より抜粋)



幸せを届ける言葉

高橋美津志著『ちょっとひとこと』より

「こころの教育」

二人の幼児と赤ん坊を連れた女性と、両親とおぼしき人が新幹線に乗ってきた。子供は車内を走り、空席のシートを飛び渡り、菓子のクズを散らかし、赤ん坊は泣き続ける、家族の不作法がまわりの乗客を困らせた。最近、他人に迷惑をかける親子が増えている。文部省中央教育審議会は、「悪いことは悪いとしつづけてみましょう」「朝の『おはよう』から始めて、礼儀を身につけさせよう」など、家庭での「幼い頃より心の教育」を提唱したが、しかし、子供を育てる親が育たなければ、よい習慣は結局、子供に伝わらない。まず親の方が、正しい社会常識を学ばべきだ。

『稿本天理教教祖伝逸話篇』10

文久三年、榊井キク三十九才の時のことである。夫の伊三郎が、ふとした風邪から喘息になり、それがなかなか治らない。キクは、それまでから、神信心の好きな方であったから、近くはもとより、二里三里の所にある詣り所、願い所で、足を運ばない所は、ほとんどないくらいであった。けれども、どうしても治らない。

その時、隣家の矢追仙助から、「オキクさん、あんたそんなにあっちこつちと信心が好きやったら、あの庄屋敷の神さんに一遍詣って来なさいたら、どうやね。」と、すすめられた。目に見えない綱でも、引き寄せられるような気がして、その足で、おぢばへ駆け付けた。句が来ていたのである。

キクは、教祖にお目通りさせて頂くと、教祖は、「待つていた、待つていた。」と、可愛い我が子をはるばると帰って来たのを迎える、やさしい温かなお言葉を下された。それで、キクは、「今日まであっちこつちと、詣り信心をしでおりました。」と、申し上げると、教祖は、「あんた、あっちこつちとえらい遠廻わりをしておいでたんやなあ。おかしい

えらい遠廻わりをして

なあ。ここへお出でたら、皆んなおいでになるのに。」と、仰せられて、やさしくお笑いになった。このお言葉を聞いて、「ほんに成る程、これこそ本当の親や。」と、何んとも言えぬ慕わしさが、キクの胸の底まで沁みわたり、強い感激に打たれたのであった。

【解説】

■榊井キクは、榊井伊三郎の母。

■「目に見えない綱でも、引き寄せられるような気がして」  
てびき、道おせなどと言われる。その時は、偶然に出会ったり、連れてこられたりするような場合でもあとから考えたら、「引き寄せられた」と実感できる場合が多い。お道の信仰をし始めるときは、みんな神様・教祖が手をひかれて導かれているのである。親の信仰を受け継いで道を歩んでいる者でも、同じような体験はあると思う。

■「句が来ていたのである」

■神様が働かれる時、時期を「句」という用語で説明される。「句のもの」という語は季節を代表する食べ物(魚・果物・野菜など)の意で使われる。物事を行う

のに最もよい時期をいう。その譬えの上に天理教用語として「信仰の時」という独特の意味が加えられたものである。同様の用語として「刻限」がある。天保9年10月25日を「句刻限」の到来という。

■「ここへお出でたら、皆んなおいでになるのに」  
『稿本天理教教祖伝』に、辻忠作が初めて参詣した時、教祖は、「此所八方の神が治まる処、天理王命と云う。」と、仰せられた。

また、本席飯降伊蔵が入信したとき、「八方の神が手をうって待つている」と話されたなどという伝承もある。当時の人々のがもっていた方位信仰・民間の仏教信仰にあったものをお道に取り込んで、親神様の教えを説こうという意図があつてこういう話をされたと思われる。

この話は、お道が、諸宗教を包含してしまうようなその許容量の大きさをよく物語っていると思う。キリスト教など絶対性主張の非寛容さと好対照をなしていると思う。最近では、大分変化しているようだが…。